

子どもは遊びで何を得るのか

MESSAGE



加古里子
KAKO Satoshi

プロフィール

1926年、福井県に生まれる。1948年東京大学工学部卒業後、民間化学会社の研究所に勤務しながら、セツメント福祉運動、生活文化活動に従事。1973年退職後、東京大学、東京都立大学、横浜国立大学等で児童文化教育論、児童行動論を講義。この間、絵本・紙芝居・物語等の創作と著述を行い、伝承遊びの調査研究を行った。絵本には、「だるまちゃん」のシリーズ、「かわ」「ゆきのひ」「とこちゃんはどこ」「ははのはなし」「あなたのいえわたしのいえ」「ことばのペンきょう(全4巻)」「海」「地球」「宇宙」「人間」、著書に「加古里子 絵本への道」(以上福音館書店)などがある。現在、科学・技術・教育・福祉に関する総合研究所を主宰。工学博士、技術士。神奈川県在住。サンケイ児童出版大賞(1963)、エッセイストクラブ賞(1975)、久留島武彦賞(1975)、土木学会著作賞(1990)、日本科学読物賞(1991)、児童福祉文化特別賞(2007)、菊池寛賞(2008)、日本化学会特別功労賞(2009)



児童教育書などを開けば、遊びの効用が要約されている。曰く

- ① 心身の発達、運動言語などの能力促進
- ② 情緒の安定、情操の適用涵養
- ③ 社会規約の遵守と集団行動での協調
- ④ 自立主体性の確立と伸展

美事な集約に異存はない。しかし例えば誕生日とかで子の友人が何人も押しかけ、果てはカクレンボで家中もぐり込む段になると、如何に①～④の為とはいえ、大邸宅でない限り親たちはヒンシュクせざるを得ない。即ち子の遊びの主軸は、いわゆる外遊びなのである。

戸外の遊びだから、空地や崖や公園の他、大人の知らぬ隣家との垣根の隙間や路地なども知悉利用する。即ち次の項目が加わる。

- ⑤ 実体験による地域環境の空間配置認識

更に遊びに集るのは同年齢のみでなく、幼い弟妹やその仲間が入り、幼少児を含む異年齢集団となる。それ故必

ずオミソ、ミッチョ、コズカなどと呼んで、出発線のくり上げや、休み所の設置など種々なハンデを与えて仲間として遇する。しかも何歳から何歳までなどの細則は一切ない。そんな不確定なのに誰一人文句もなく、この超法規的ルールが全国の遊びの場で遵奉されてきたのである。それは幼少児に対し体力知力差を補う策を施し、共生共楽の同志として、互助互恵の実践実行を展開しているのだ。従って次項が添加されることとなる。

- ⑥ 異年齢の連帯仲間意識と共生精神の確保

一方遊びの場では各種の禁止区域や罰則区画が設けられ、それにはベンジョ、コエタンゴ、ドボンなど糞便学的呼称がふんだんに用いられ、誤って片足をふみ外そうものなら、あたかも本物に接した如き嘲笑嬌声が飛び交い、種々なハヤシ歌やカラカイ語には純心牧歌的表現に交って、秘かに下品わいせつな隠語禁句を混入させ、更に遊びの順調な進行を妨害渋滞、逸脱する行為や、偽悪非倫を謳歌する行動が夾入している。これらは次を伴っていると言いついで得るであろう。

- ⑦ 悪徳への傾斜発生と低俗への関心発散

要約すれば、子の遊びには①～④の効用の他、⑤～⑦が附加しているのが実態である。その為か②③⑥と矛盾する⑦をのみ重視して「イタズラ」を奨励したり、「善導」に

のり出し、末はドブ掃除や神社清掃に終るなどが戦後各地で行われた一方、逆にせつかく遊ばせているのに①～④の成果が出ないところばす親がいたりする。しかし善導奨励や効用効果を得ようと遊んでいる子は一人もいないのだ。これは一体どういう事なのか。

そもそもこの世に生まれ出た子は、その時から生きようとする。それ故泣き、叫び、飲み、食べ、働き、排泄し、そして遊ぶようになる。体が伸び、知恵を得れば、それらを動員してわあわあキャアキャア走り回る。それで得た空腹と疲労はよき食欲と睡眠になり、次の日又新しい意欲を持つに至る。従って「わあわあ」はこの生きる力の現れであり、その生きる意欲を持って子が日々を重ねる時、結果として①～⑦が結実し、成長がもたらされる。

「わあわあ」の騒音喚声がうるさいとばかり、静粛を厳守させられた孤児達が生きる意欲を失った悲惨な人生の例は珍しい事ではないが、成長した子は必ず「わあわあ」の遊びを卒業してゆくのである。遊びで発揚錬成された生きる力は、学校等の教育指導や社会の刺激と相まって、各自に適したよりたくましい、よりすぐれた、より美しいよき生命意欲に燃え、それぞれの目標を目指すこととなる。これが遊びによって子が与えられるもの、一人一人が自らの力で獲取する宝なのである。

郡上八幡吉田川(写真:初芝成應)